

喜寿談議

還暦・古希そして

文・写真 (株)地域サービス代表取締役

永井 英彰

藍住バラ祭り20年振り復帰

都をどり、仁和寺でくつろぐ

板野郡藍住町は町制施行60周年を迎えたのを記念した、矢上の町バラ園で恒例の「春のバラ祭り」(5月3～17日)が開かれ大賑わいとなった。県下一を誇る19・8町の園内にイングリッシュローズやフレンチローズなど約300種、1100株が植えられている。園の管理担当者・大久保明さん(72)によると今年は病気や害虫の発生も少なく、例年よりきれいに開花したという。2回のバラの栽培講習会も、初回には約80人が集まるなど大盛況だった。

久しぶりセリに参加

(株)地域サービスはここでバラ苗の販売をさせてもらっている。昨年までは弟・俊彰が取り仕切っていたため、急死されてみると筆者がやらざるを得ない。約20年前にやっていた事を思い出して、町観光物産協会のテント張に参加。市場への仕入にも復帰した。自社の番号は覚えていたが、目が霞んでセリの花が良く見えない。旧知の友に確認しながら、何とか少しミニバラや苗ものを仕入れた。出店の手順を思い出しながら、長年会社に携わってもらっている二人の女性の手助けを得て、何とか開店。私は専ら仕入に

廻り、多い日は1日に4回も往来した。お蔭で、散歩をしないのに、15000歩を超える日が10日以上あった。ある日、くたくたになって店に戻ると、堀を挟んだお向かいの奥さんが「溝の掃除を手伝って」と声を掛けられた。そこで疲れを見せず長靴に履き替え、草を抜いた後特製の「さらえ」でドブを浚え、竹で編んだ塵取り(ツツミ)で地上に運んだ。やっと終えて自宅に帰ったら両膝は炎症を起している。この日は2万歩を超えていた。数日、朝晩にシツプを貼って手当をしたら何とか治まった。妻は「散歩を

せずに仕事をして歩数の多い方が上。わざわざ散歩するのは時間の無駄では？」とのたまう。

5月10日、「勝瑞城館跡まつり」が開かれた。出水康生先生率いる三好長慶会が講演や武者行列を挙行、県外からも多数が参加してくれた。しかし、筆者はバラ園の販売が最も忙しい日と重なったため、顔出しもできず申し訳ない事となった。17日までの開催期間中、努力の甲斐あって昨年並みの成績を挙げられた。昨年、弟・俊彰の販売時間が前年より1時間少なくなっていた事が判った。もしかして、弟は多少の自覚症状があつて身体がきつかったのではないかと推定している。

都をどり楽しむ

弟・俊彰の死亡など心の晴れない日々が続いたので、4月18日、徳島調停協会のお誘いを受け喜んで京都へ出掛けた。まず、老舗の料理旅館・

き乃ゑで早目の昼食、ビールの肴に似合う懐石料理に舌鼓を打った。歩いて5分ほどの祇園甲部歌舞練場で。12・30分から「都をどり」を楽しんだ。

都をどりは東京遷都で衰退した京都の繁栄策として、明治5(1872)年、京都で日本初の博覧会が開催された時、余興として万亭の杉浦治郎右衛門と井上流家元の井上八千代(三世・片山春子)が企画したのが始めと言われる。伝統の上にその年の干支や話題を取り入れ、常に新たな志向を試している。舞子たちの演奏の中、芸妓たちが島田鬻を地毛で結った正装姿で登場する。同行者が「美形の芸妓・小喜美さんは徳島市中心街の出身だよ」と教えてくれた。き乃ゑで聞いたら舞妓、芸妓、囃子のセツトで一席12万円で座敷へ読んでくれる、との事だった。

仁和寺は世界遺産



バラの育て方説明会(藍住バラ祭り)



京都の料理館「き乃ゑ」で



昼食の会席料理



都をどりの会場(祇園歌舞練場)



徳島出身の小喜美さん(パンフレットより)



世界遺産の仁和寺



右近の橋（ニホンタチバナ）



花卉が大ぶりで厚い御室桜



同集を出版した安曇さん



同席した和服の似合う美女たち



朴の花

つるぎ町一宇川又の川又民子さん（74）が5月3日、くも膜下出血のため急死された。今月にも訪問しておいしい薬草のテンプラをご馳走になることを楽しみにしていたのに残念である。民宿はしばらく休業のようだが、なんとか後継者が現れるように切に希望している。

仁和寺は右京区御室おむろにある真言宗御室派総本山の寺院で、開祖は宇多天皇。皇室とゆかりの深い寺（門跡寺院）で、出家後に宇多法皇が住んだことから、御室御所と称された。明治維新以降、仁和寺の門跡に皇族が就かなくなつたので「旧御室御所」と言われている。国宝の金堂は旧皇居の紫宸殿が移築されたものである。御所だったので庭には左近の桜、右近の橋が植えられている。御室は桜の名所としても知られている。御室桜は約500本あるが遅咲きで、樹高は2〜3mと低い。「わたしやお多福御室の桜 はなは低とも人は好く」と囃されるが、花弁は大ぶりで厚く、色の濃いのが特徴である。

調停協会会員の一人が御室派の住職だった関係で、仁和寺の広報担当者が特別に黒書院や庭園などを案内してくれた。

安曇統太（田子雅之）さんが句集「酔いどれて統太」を出版された。安曇さんが敬愛する風嶺俳句会主宰・上窪青樹さんの序の一篇は次の通りである。

北を発ち南へ帰る六月尽（平成26年6月）

統太は長年勤めた大病院の事務局長を辞し、夫婦で北海道の最北の地へ旅をしたのだが、旅先で胆嚢炎を発症し、その地で入院、容体が落ち着くのを待つて徳島へ帰り手術をした。七転八倒、死を思うほどの苦しさがたらしいが、その時の句である。私はこの句を人生の大転機の句と見ている。妻と二人だけの最北の知らない地で病み、妻の看病を受けて無事生還した。

傍若無人に飲み歩いた時代の終焉ととれると共に、帰るところは妻の胸との思いを強くしたに違いない。私はこの句を

無頼よさらば妻の胸へ帰る
雨の果て

の意のように理解している。

4月19日阿波観光ホテルで開かれた出版祝賀会には165人も出席者があつた。尺八の木南征山さんが琴の遠藤綾子さんとコラボレーション。その間に句を朗読するという初企画があつて、興味深かつた。安曇さんの現役時代の関係からか、県内の多くの病院関係者が出席していた。私のテールにも和服の似合う美人が三人もいた。筆者がナプキンに使うハンカチーフを「綺麗ですわ」と褒めると「和服の三人はどうですか」と聞かれた。

筆者は「間接話法の方が口に出しやすいものですから」と応えた。

バチカン訪問記放映

4月30日、鳴門駅前前の井上ホールで、旧撫養農業研究会の例会が開催され、映像を使って「4度目のバチカン訪問記」の話をさせてもらった。この映像はエコジャ連載の四国大学講師・上野昇さんに自宅へ来てもらい作成して頂いた。主催者の一人・野田靖之先生の苦心の甲斐あつて無事放映することができた。たまたま出席者が男性ばかりだったので、イタリア・ボンベイ遺跡から発掘されたエロチカカのエピソードをたくさん映写した。編集時に、上野講師から「この写真が多いですわ」と言われたが、今回わざわざナポリまで一人旅して写してきたので、ぜひ披露したいと返事していた。

硝酸態窒素濃度の話

出席のイシイフーズさんからは食品の安全性についての報告があつた。この中でホウレン草などに含まれる硝酸態窒素の値について触れられた。ヨーロッパは含有量の制限があるのに、日本ではなぜ規制が無いのかを質問した。ヨーロッパでは幼児にも生野菜を食べさせる習慣があるので規制が必要となる。しかし、日本では晒したり、茹でたりして食べるので硝酸態窒素が減るため規制がないのだという。しかし、日本でも生野菜を好む人達が増えているので硝酸態窒素に用心する必要があるように思う。

他に無農薬栽培プラグ苗でカボチャの実物苗を見せてもらった。また、葉の大きい朴ノ木の花もみる事ができた。

川又民子さんが急死